

文人の足跡を手賀沼畔に訪ねる―館山との縁

池田恵美子(NPO法人安房文化遺産フォーラム、安房支部)

小春日和の文化の日。首都圏のベッドタウンである我孫子市で、文化の薫り高いまちづくりが進められていることに感動しました。

まず、予想以上の収穫と感じたのは、11月1日に新設オープンしたばかりの杉村楚人冠記念館です。2年前に自治体が遺族から邸宅を譲り受け、広い庭園は購入、建物は市文化財に指定して修復し、公営の記念館として開館に至ったと伺いました。

館山では、戦跡と里見氏稲村城跡に続く文化財保存の市民運動の成果として、画家の青木繁が滞在した「小谷家住宅」が市指定文化財となりましたが、市条例では個人所有文化財の維持管理費は所有者負担とされています。かねてより《海の幸》が描かれた漁村・布良は美術界の聖地といわれていたこともあり、私たちは全国の画家や美術関係者の方々と連携を図りながら、「青木繁《海の幸》記念館(仮称)」をめざして修理基金を募っているところです。我孫子市の事例は大きな希望の光となりました。

そして、私たちのもう一つの関心ごとは、柳宗悦と嘉納治五郎の人脈でした。宗悦の父・柳樽悦は海軍水路部の軍人で海洋測量の第一人者です。その技術を買われ、近代水産業の先駆者・関澤明清とともに、後の東京水産大学・海洋大学となる水産伝習所を創立します。官立の水産講習所となった1901年には館山実習場が開かれ、今なお同大学の研究施設が置かれています。

宗悦の兄・柳悦多は水産講習所を卒業後、館山で日本最初の内燃機関搭載の漁船を建造し、魚の研究や水産事業を行ないました。その一方、旧制安房中学で柔道や野球の指導にあたり、講演中に関東大震災に遭遇、校舎の倒壊により殉職しました。悦多の遺児は、長男・悦孝が染色家で女子美術大学長となり、次男・悦清は長年安房高で漢文を教えました。私の恩師でもあります。

宗悦の母は、樽悦の三番目の妻・勝子といい、講道館柔道の創始者として著名な嘉納治五郎の姉です。治五郎の甥にあたる悦多が、安房中柔道の

千葉県歴教協の集大成が

1枚のDVD(2011年改訂版)になりました

このDVD(「わたしたちの歩み 2011年改訂版」)は、私たち千葉県歴教協の1954年からの、およそ50余年にわたる歴史と言っても過言ではありません。千葉県歴教協の会員であっても初めて見る会報や会誌および『100時間』『100話』など絶版の書籍を集録することができました。

私たちは、21世紀を迎えながら、歴史教育・社会科教育のために、地域や子どもたちに根ざした活動をさらに続けていこうと考えています。そのためにも、過去に、千葉県歴教協の会員たちが何を語り、どのような実践を積み重ねてきたかを知らなければならないと考え、DVDを製作するに至りました。

全国のなかまたちとともに、私たちの活動をふり返り、財産となることを期待しています。

このDVDをご希望の方は事務局までご連絡ください。1枚千円です(郵送料含む)。(M)

礎を築いたといっても過言ではないでしょう。また、治五郎が校長を務めていた東京高等師範学校は1903年より館山で水泳練習を始め、今も筑波大学館山研修所が置かれています。当時、水府流太田派の古式泳法を極めた同校の水泳師範・本田存は、地元の安房中をカッパ中学と異名をとる水泳日本一に導き、古式泳法も伝えた功労者です。1919年には、安房出身の在京学生を支援するための安房育英会が設立され、文京区に開かれたという記録がありますが、その敷地は講道館の一部であったともいわれています。

私たちの暮らす一地方の視点から中央を俯瞰すると、興味深いネットワークが見えてきます。さらに柳家の家系図を整理してみても、意外なつながりに気づきました。まず、宗悦の次男・宗玄は、志賀直哉の四女・万亀子と結婚しています。また、宗悦の姉・直枝子は仁川の総領事を歴任した夫・加藤本四郎と死別し、母勝子と暮らす邸宅を購入しますが、東郷の紹介で海軍軍令部長の谷口尚真と再婚したため、弟・宗悦夫婦が我孫子に暮らすことになったようです。宗悦の妹・千枝子の夫・今村武志は、朝鮮総督府内務局長、朝鮮史編集委員を歴任、戦中・戦後は仙台市長を務めており、その息子・今村成和は法学者として国家補償という概念を提唱した北大名誉教授です。朝鮮との関係も、それぞれの立場によって、兄弟姉妹は複雑な思いであったかもしれません。

たくさんヒントを得ることができ、充実した一日を過ごせました。ありがとうございました。

我孫子散策

平形千恵子(船橋支部)

開館3日目の杉村楚人冠記念館を大変興味深く見ました。旧宅は、開館のためはかなり整備されたようですが、なかなか趣のある住宅でした。楚人冠の人柄を表しているような住まいを残しつつ、少ない展示スペースに、著作やゆかりの品が工夫して展示されています。「年に何回か展示を変えていく予定なので、またゆっくり来てください」とのこと、これからも期待ができそうです。斜面に広がる庭も、木立の中を散策できて、あまり手が増えられていないのがいい。下の田にまで広がっていたという当時のゆつたりした自然なようすを再現してみたいようにも思いますが、もちろん住宅地になっていて無理。想像をめぐらすのみでした。

白樺派文学館は、白樺派とは別の関心をもって見ました。配られた資料にも「多喜二への手紙、白樺の宝」(『朝日新聞』2009年5月27日付、人・脈・記、大逆事件残照7)が載っていましたが、2009年4月に「ユニークな経済人の手を離れて我孫子市に移管した」とのこと。

我孫子を歩きに行くと話すと、数年前の「千葉県私学退職教」のニュースを紹介されました。そこには、「我孫子市に移管される時に、白樺派ではないからと、それ以前には展示コーナーがあった小林多喜二関係の展示を撤去するように申し入れがあった」とあります。

次の文は、千葉県私学退職教員会の「手賀沼ウォーク」参加記の白樺文学館の部分です。

「白樺文学館、ここはIT企業、日本オラクルの初代社長の佐野力氏(小樽商科大学卒)が私財を出して建設した。(中略)白樺派の作家たちと交流のあった小林多喜二のコーナーもあり、志賀直哉が多喜二に宛てた手紙も展示されている。30分で読める大学生のためのマンガ「蟹工船」は、この館が発行した。「カニコー」ブームに火をつけ、その後「蟹工船」エッセーコンテストの入賞作品集を発行している。館の人の話では、来年4月から我孫子市に館の運営をお願いしたとのことである。しかし、我孫子市からは、小林多喜二関連のコーナーは、総て撤去してほしいと申し入れがあり、現在小樽の方へ運ぶことになっているそうである。これは小林多喜二関連のコーナーだけ撤去せよと言



楚人冠公園に建つ陶板句碑

う思想的な差別であり、現在高まっている「蟹工船」ブームに対する攻撃でもあると思う(一部略)。何としても貴重な資料を我孫子に残せるようにしたいと思っている。」

今、どうなっているのかという興味をもって参加したのです。注意して見ていくと、志賀直哉の小林多喜二宛ての書簡が一つだけ展示されていましたが、多喜二のコーナーはありません。1階の本棚に「小林多喜二全集」やマンガ「カニコー」などをふくむ関係図書があるだけでした。

受付で「小林多喜二関係の資料があったはずですが」と聞いてみると、「以前は小林多喜二のコーナーがあったが、白樺派ではないからと、撤去されることになり、東京の世田谷の佐野さん、持ち主の方がひきとられたと聞いています」と詳しくは知らないようでした。

北海道の歴教協大会(2009年)で、小樽の小林多喜二関係のフィールドワークに参加した時に見た資料のことを思い出しますが、千葉にも多喜二関係の資料があったのですね。撤去される前に見ておけばよかったと悔やまれます。楚人冠ゆかりの我孫子の地である白樺文学館に、志賀直哉が小林多喜二悶死の記事を見て「小林多喜二の母にクヤミの手紙を書く」(志賀直哉の日記)と記したという、その小林多喜二の資料が残されていたらと、残念でした。

第2回全国大会現地実行委員会の議論から

柄澤 守(大会事務局長)

県委員会と同時開催という形で第2回全国大会実行委員会が行なわれました。本部から大会構想1次案が出されたことを受けて、以下の点について論議しました。

①大会テーマと実践の課題

本部提案に対して異論が出され、以下のように修正するよう要請することになりました。

テーマ 地域と子どもに根ざした歴史教育の創造

実践の課題

- ・地域に根ざし、大震災の被害を乗り越え、原発ゼロの世界をめざす。
- ・地域に根ざし、平和と民主主義の未来を創造する。
- ・地域に根ざし、子どもが主役となる授業作りを追求する。

議論では、本部提案にさまざまな批判が出されました。まず大会テーマ「地域に根ざす一大震災・原発・地域再生を見据えて」については「歴史」も「子ども」もなく、どこの団体のテーマなのかわからない。そして実践の課題についても、「世界に目を向け、平和と民主主義の未来を創造する」では、安房支部の活動に代表される地域から平和をつくる観点が抜けている。また「わかって楽しい授業づくり」と千葉県歴教協が追求してきた「子どもが主役となる授業」はちがうなど、厳しくも白熱した議論になりました。

②日程

ようやく全国大会の日程と会場が決まりました。またスケジュールが以前チラシでお知らせしたものと少し変わりました。閉会集会の前に予定していた地域に学ぶ集いを、分科会1日目の夕刻に移動しました。最終日では、参加者が地域に学ぶ集いの前に帰路についてしまう心配があるからです。

③全体会

津田沼駅前の習志野文化ホールで行ないます。従来とちがって夕刻に始まり、内容は講演がメインですから、全国の会員や市民を集めるには魅力的な講演者を招かなければなりません。第1候補を澤地久枝さんとして本部に交渉してもらっています。しかしご高齢でもあり、健康の関係でOKが出ない場合は至急次の候補を立てる必要があります。また地域実践報告を大会最終日に設定した関係で、講演前のアトラクション?の時間が短くなりましたが、柄澤が勤務する市立習志野高校の吹奏楽部(日本有数の名バンド)に演奏を快諾してもらいました。

④地域に学ぶ集い・現地見学

日程が1週間ずれると現地見学のプランを変えざるをえなかったため、やきもきしていましたが、8月上旬実施が決まったことで、基本的に従来の見学プランで実施できるようになりました。各支部で年内を目途に具体的な内容を考えてください。ただし、「地域に学ぶ集い」は、従来の全体会後から分科会を1日やった後が変わっていることを念頭に置いてください。分科会でへろへろになっている参加者があえて行こうと思う題名、そして来てよかったと思える中身を検討してください。また現地見学は、福岡大会ではコースが多すぎて実施できなかったものが出たことを教訓にして、数を絞ろうと思います。年輩者が増えていますので、暑さ対策や水分の補給なども考慮に入れてコースを立案してください。また前回のなかまにも書きましたが、公共施設が休館する月曜実施であることをお忘れなく。

⑤歴史地理教育連載

1ページで千葉県歴教協のよさを紹介する「菜の花だより」(命名柄澤)が7本、4ページで千葉の実践や地域の掘りおこしを紹介する「千葉大会・地域に学ぶ」が4本です。すでに支部や個人的にお願いし、概ね執筆者が確定しました。読者が、早く千葉に行ってみたい! と期待をふくらませるような内容を期待します。

	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9
3日	金		社員総会			プレコース				受付	全体会		※
4日	土	分科会(3h)			分科会(3h)				地域に学ぶ集い			各県交流会	
5日	日	分科会(3h)			分科会(1.5h)		閉会集会						
6日	月	現地見学											

※分科会打ち合わせ

■福岡大会に参加して

第17分科会(中学校歴史)に参加して

白鳥晃司(松戸支部)

この分科会には、2年ぶりに参加しました。私自身としては、昨年の愛知大会の平和教育分科会で発表した「杉村楚人冠と大逆事件」を発展させて、『東京朝日』記者・楚人冠が日露戦争終結の1905年に起こった東北の飢餓のようすを、翌年1~2月に取材した記事「雪の凶作地」の内容の事実を、中学校で教材化できないかという趣旨のレポートをしました。地域から、大逆事件と近現代史学習のとらえ直しをしてみたいというささやかな提案です。

個人的に印象に残った点をいくつか書いてみたいと思います。分科会では、8本のレポートが報告されました。参加者全体も少なくなっているため、分科会参加者もかつてのように50名には届きませんでしたが、そのうち、若手のレポートが3本あったのは素晴らしいことだと思いました。

レポートは、他の7本が近現代史に関わるものだったのですが、「サルからヒト~中学校の授業開き~」は、東京の女子中学校での実践です。昼食・弁当の時間でさえいっしょに食べるのでできないなど仲間づくりが難しい状況で、どんな社会科の授業をやったらよいのかという問題提起のある報告でした。歴史の授業って、面白い! 自分の考えを何でも言えるのが社会科だね! とねらったことと、自身の学生時代の人類進化の研究のさまざまな説を生徒に投げかけたものです。

若手二人目の「ある日本兵のつくられ方」(愛知)のレポートは、戦争の加害体験を語った兵士の生の証言をどう生徒が理解していったのかというもの。そして、3本目のレポート「よりよい日中関係のあり方～南京事件をめぐる～」(京都)は、日本の側にある「嫌中感情」と中国の「反日感情」を克服したいとの願いから出発したものです。それぞれ新鮮で意欲的でエネルギーに取り組んでいます。若手にはこれが必要です。歴史に生きた人々、そして歴史事実に対して、生徒自分が身を寄せながら迫る—あるときはいつよになって、あるときは鋭く批判的に葛藤しながらその人々の行為や事実はどう迫るのかという点で、若手の実践を励ますことができたのか、分科会の参加者の意識と分科会運営がいつも必要になるのではないかと考えます。その点では、本分科会担当世話人の班別討論を基礎に運営されていることに敬意を表したいと思います。

世話人による、戦後史プランを意識した授業づくり講座の「中学校現代史の授業」(埼玉)と、歴史に祖父母・父母そして自分たちは生きているのだと実感させようとする「わが家の20世紀年表」(北海道)は、さすが歴教協の中学校の研究を支える方々の報告です。

「戦中・戦後の体験の聞き取りとその今日的意義」(東京)と「憲法学習を豊かにする近現代史学習」(埼玉)も今までの歴教協の研究・実践とからめて学んでいくことが必要だと感じました。

全国大会で学んだことを自分なりにまとめてみようと思っているさなか、人権をないがしろにする「つくる会」系教科書が、この夏、いくつか新たに採択されている地域があります。今回の分科会のレポートは近現代史中心だったわけですが、原始・古代の学習から、基本的人権がどのように獲得されてきているのかを学ぶことができる内容を対置することが、あらためて必要だと考えさせられます。憲法97条〔基本的人権の本質〕で規定される中身「この憲法が日本国民に保障する基本的人権は、人類の多年にわたる自由獲得の努力の成果であって、これらの権利は、過去幾多の試練に堪へ、現在及び将来の国民に対し、侵すことのできない永久の権利として信託されたものである」を、サルからヒトへの進化学習から当てはめて考えているところです。

教育科学研究会全国大会に参加して

午腸 勲(日本史部会)

8月6日から3日間、法政大学市ヶ谷キャンパスを会場に、教育科学研究会全国大会が行われました。甲子園も始まり、ヒロシマに思いを馳せつつ、初日から参加しました。

特に2日目の「社会認識と平和」分科会のテーマは「震災、原発を子どもとともに考える」でした。最初に4人の世話人による基調提案がありました。東京・八王子の小学校に勤務されている神原昭彦さんは、テーマの「原発」「3・11」が投げかける「公的な正義」についての活発な意見交換に期待したいとのことでした。神原さん自身、テーマの文言に込めた思いは強いようで、ご自身の実践についても、常に「子どもとともに」ということを意識していると強調されていました。

2人目は東京家政学院大学教授の佐藤広美さんです。2000年に亡くなった科学者の高木仁三郎氏について取り上げ、提言し続けることの重要性和難しさについて改めて思い直しているということでした。高木氏は、1973年に都立大学を辞め、2年後に原子力資料情報室を設立。以後、反原発・脱原発活動に一生を終えたという方です。私が生まれた頃は「オイルショック」で、原子力が「夢のエネルギー」だったであろうことは、容易に想像がつくところです。そんな1970年代に多くの人が今日の姿など思いもよらない時代に高木氏が行った活動を思い返そうという提言は、私の生育歴とも重なる時代のことであり、大変参考になる提言でした。

3人目は、北海道立江別高校の先生で、実践提案もされる池田考司さんです。3.11以後の社会と学校社会を比較検討したうえで「シチズンシップ」教育の欠落と「市民」社会の貧弱さを指摘されていました。生徒会活動の不足が市民活動の貧弱さとリンクしているという分析は、なかなかだなと思いました。子どもの被曝に関わる母親たちの行動など、市民運動に発展するケースもあるが、大きくなりにくい責任の一端は学校教育にあるとする意見に、耳が痛い思いです。さらに、今後

の学校教育に関して、指導書や教育技術雑誌に頼って授業をする若手・中堅層教員の増加を憂えています。被災地復興と絡めて地域の崩壊を助長するような「学力」感も然り。そうした大きな流れを現場で断ち切らんとする思いを語っておられました。

最後に、久保田さん(愛知県立大学)の提言。「3.11」の中で置き去りにされる子どもたちの状況を憂い、「1995」を想起していたそうです。オウム事件や阪神大震災を経て行われた構造改革や新指導要領を想起します。学校では教室内の新しい「荒れ」や「学級崩壊」。中でも、先ほどの池田さんのブログでの生徒の意見に衝撃を受けたということです。「政府・政治家はあてにならない」「国として機能していない」という意見に、久保田さんは「酒鬼薔薇事件」の犯人の少年の言葉「首相にガッカリ」に近いものを感じたということです。特に、教育に携わる者として、こうした子どもを追い込むような状況は他にもあるとして、教科書問題や指導要領の問題をとらえ直したいということでした。私自身の体験から、17年前の神戸について思うところもあって、社会背景とのリンクがうまくいった、腑に落ちたといった感じがありました。

翌日の午後、世話人でもある北海道立江別高校の池田考司さんの実践報告がありました。報告は、原発に関する賛否両論の資料を徹底的に収集し、生徒に配布。それらから持論を組み上げて、討論に向かわせるというものです。まず1時間目に診断的評価になるでしょうか、「原発、どうするか」という問いを投げかけ、各自の初発の意見を書かせて回収。その後も資料配付・読み込みを繰り返すこと3時間。毎時、形成的評価に当たるでしょうか、各時間に配布した資料に適した形で質問し、意見を回収(例えば、新エネルギーについての資料配付後、「新エネか、原発か」など)。特に最後の4時間目の意見をもとに、「脱原発」「縮原発」「原発維持」の三つの意見に集約し、討論グループをつくって最後に1時間、討論を深めるという実践です。DVDに討論の実際の映像も残っていて、活発なことがよくわかります。資料を引用するまで読み込むのも大変そうな資料の多さでしたが、感覚的に読みこなしたであろう意見も見られ、毎時間回収する意見とともに、生徒の認識の深まりが分析できる形ができていることに興味を覚えました。さらに、意見の分析から、生徒理解にまで深め、教育相談的指導に発展していたことも興味深いところです。自分でも実践してみたいと思う報告でした。

最終日、午前中は昨日と同じ久保田さん世話人の「社会認識と平和」分科会に参加。昨日に続き、教科書や学習指導要領のあり方に関する議論となりました。最初に教科書問題について世話人で東京家政学院大学教授の佐藤広美さんから分析報告があり、久保田さんの学習指導要領に関する分析報告と続き、議論に移りました。全体に批判的な流れとなることは想像できましたが、「批判を超えた提案」が欲しいという議論になり、おもしろい展開となりました。

印象的だったのは、世話人で東京・八王子の小学校の神原昭彦さんの発言です。「法・きまり・ルール・道徳」を結びつけて、法教育や道徳教育を整えようとする指導要領の下でもこれらの違いに気づかせたいという思いを表されていました。「フォーク並び」と言われてわからなかったのですが、小売店のレジの前に一列に並び、空いたレジから会計に入るシステム。銀行のATMでも見かけるそのシステムは、まさに「法」でも「道徳」でもありません。そんな社会的に認知されつつある「ルール」のあり方を、生徒とともに考えていけたらいいとの発言でした。この視点を参考に、もっと指導要領を読み込み、批判的な観点も持ちつつ、実践していきたい。

最後に、『新採教師は何故追い詰められたのか』の著者の一人佐藤博さんのメッセージがありました。大震災にあらがう前から教師には困難さがつきまとうことを認め、数々の励ましの言葉を列挙されていました。中でも、暴言の「思春期翻訳機」なるものを頭の中に常備せよというものには会場中から笑いがこぼれました。「死ぬ」は「おはよう」、「うざい」は「距離を取ってね」、「教師失格!」は「いい教師になってね」。最後に爆笑したのは、それでも不愉快な感情は「給料の半分は感謝料と思え」と先輩から言われたというところでした。映画の中の教師を見て、同化するのもいいじゃないかといいます。特に「寅さん」は教師の写し鏡だということに、妙な共感を覚えました。生徒はマドンナみたいなもの…、と言われれば納得できます。それでも、生徒の言葉に救われるわずかな瞬間を信じ、仕事を続ける。そうしたメッセージに社会科教師への志を確かにした、そんな大会でした。

赤紙一枚で戦場へ

鳥塚義和(東葛支部)

1. 授業のねらいと教材

一五年戦争の学習では、生徒が過去の戦争を「ひとごと」ではなく、「自分にも関わりのあること」として切実にうけとめられるようにしたい。

そこで、戦争学習の最初に兵士の戦争体験をとりあげる。召集令状を受けとり、入隊する。人殺しができる人間に変えるための厳しい訓練。そして戦場へ。生徒が一兵士の立場に身を置いて、「自分だったらどうするか」を考えさせる場面を設定する。民衆の苦しみの原因を追求していくことで、加害者になるところまで追いつめられた民衆の姿が浮かび上がってくる。

1時間目は、完全復刻版の赤紙を使って、徴兵制のしくみを具体的に学んでいく。

2. 教材の解説

この授業のカギは、導入で本物に近い赤紙の実物教材を用意し、生徒一人ひとりに配り、当時の民衆の立場に身を置かせることだ。

これまでも教科書会社等が「赤紙」の複製をつくっているが、いずれも「受領証」の部分が欠けていて完全版ではない。赤紙のことを「一銭五厘」と呼ぶことがあるが、ハガキで届けられたわけではない。赤紙は村役場の兵事係が応召者のところに直接届け、受け取った本人が受領年月日時を記入して捺印し、「受領証」の部分を切りとって渡し、兵事係はそれを持ち帰ることになっていた。だから、授業では完全版を生徒に手渡すことから、兵士への道をたどらせたい。

私の作成した赤紙は、「受領証」の部分がついた黒田俊雄編『村と戦争 兵事係の証言』(桂書房、1988年)付録の昭和16年7月10日付の赤紙に手を加えたものである。次の点を修正して、より完全な復刻版にした。

①付録の赤紙は赤色で復刻されているが、この時期の赤紙は赤色ではなくピンク色に変わっているので、ピンク色で復刻した。

②赤紙の表面の「富山聯隊区司令部之印」を朱印にした。

③裏面の「後払いに関する注意事項」と「応召員の心得」の部分が省略されていたので、他の復刻版で代用した。

当時、男子は20歳になると徴兵検査を受けた。赤紙の右下に「徴集年昭九年兵」と書いてあるのは、彼が1934年に徴兵検査を受けたことを表している。検査の結果、甲乙丙丁戊の五種類に分けられ、甲は兵士に適任で合格、乙・丙は甲に準じ、丁は不合格である。

戦争でないときは、甲種合格者の中から抽選で一部の者が「現役兵」として軍隊に入り(ただし、1939年に甲種合格者は全員現役兵として入隊することになった)、2年間の訓練が終わると自宅へ帰ることを許された。しかし、その後も「予備役」「後備役」として兵役は続く。乙種合格の者は「補充兵」であり、当分普通の生活を送る、いわば待機の状態である。そして戦争が始まると、人員の不足分を、赤紙を発行して、「予備役」「後備役」「補充兵」から調達した。氏名(根尾忠)の前にある「像備役」はその区分である。

3. 授業の組み立て・提示のしかた

1時間目は、十分時間をとって、赤紙をじっくり読みとらせる。

『君たちは戦争中の若者だ。こういうものが君のところに届けられる』と言って、いきなり赤紙を生徒一人ひとりに配る。

『これは何か』『赤紙』『召集令状』。『何でもいから、これどういうことって疑問に思うこと、知りたいこと、わからないことを一人三つプリントに書き出してください。時間は10分』。この間、教員は生徒の間を回って、典型的な疑問を書いている生徒をチェックしておく。後でその生徒を順に指名

して、質問を出させる。

『では、疑問・質問を出してもらおうよ』と言って指名する。

「どのように届けられるのか」『いい、質問だね。誰かこうだと思う人いる』なるべく教員が説明するのでなく、生徒から出た疑問を生徒の中で解決させるようにしていく。「郵便」「誰かが家まで持ってくる」。『誰が持ってくるの』『?』『実は、郵便で配達されるのではなくて、町や村の役場に兵事係という専門の係がいて、その人が直接家まで持ってきて、本人に渡すんだ』

「受けとったのは誰か」『誰かわかる人』『根尾忠さん』。こうした問答で次のような事実を確認していく。

- ・根尾さんの住所は富山県東砺波郡庄下村(ひがしとなみぐん・しょうげむら)。
- ・受けとったのは昭和16年7月10日午前4時45分。右側の「受領証」に、日付と時間を記入し、捺印した。点線で切り取り、兵事係に渡した。
- ・戦死者も増えて「充員」として予定した動員計画では足りないので「臨時」に徴兵した。
- ・「昭九年兵」とあり、1934年に徴兵検査を受けたので、この赤紙を受けとったときは、27歳である。
- ・「予備役」とは、「現役兵」としての務めを終えた後、市民生活に戻っていた人であり、「山砲兵」は兵の仕事の種類、「上等兵」は階級をあらわす。
- ・誰に赤紙を配るかを決めているのは、連隊区司令部。本籍地、現住所、氏名、生年月日、体格、健康状態、家族構成はもちろん、一人ひとりの学歴や性格、職業、技能や資格、思想まで調べ上げてあり、そういうデータを軍が持っていた。

「受けとった人はどうしなければならないのか」

「軍隊に入らなければいけない」。

『いつ、どこの部隊に入れと書いてあるの』

「7月18日。金沢市の東部第52部隊」

『金沢までは列車で行く。「乗車区間出町一金沢三等」と書いてあるね。左側の部分は切符のかわりになる。部隊に着いたら赤紙は提出する。本人が保存しておくものではないから、現在残っているのは少ないわけだ』

最後に、次の疑問を出させる。

「行かなかったらどうなるのか」「断ることはできるのか」

『実はそういう場合のことは赤紙の裏面に書いてあるんだ。見つけなさい』

該当箇所(「拘留又ハ科料」)を確認し、1時間目を終える。

4. 教材の持つ力

実物教材は、生徒をひきつける力を持っている。それは、五感を使って認識・観察できるから入りやすく、文字だけの資料と違って学力差にあまり関係なく誰でもとりくむことができる。また、ホンモノだからこそ、そこにたくさんの情報が含まれており、生徒は、自分の生活経験と結びつけて、そこから情報を引き出そうとする。

この授業では、次のような感想が出された。

*今日、初めて赤紙を見ました。私は、赤紙というのは郵便で朝届き、しかも文書であるとばかり思っていましたので、実物を見て驚きました。

*赤紙の実物を見て想像していたものと違っていた。なぜ「赤」なのかはわからないけど、闘牛のようにうけると側の闘争心をあおるもののだと思った。(わかりやすくするためだけかも…)。

*よくTVドラマなどでは、赤紙が来たとき、本心はすぐく嫌そうでしたかたなく行く、という設定をやるが、本当はどうなんだろうと思った。

こうして引きだした関心、疑問をバネにして、2時間目は、次の発問から始める。

『さて、今の君自身がタイムスリップして、突然この時代にまぎれこんでしまい、この赤紙を受けとったとします。今、どんな気持ちですか。一番近いものを次の三つから選んでください。a.喜んで行く、b.やむをえない、c.いやでたまらない』

参考文献

-
- ・小澤真人・NHK取材班『赤紙一男たちはこうして戦場へ送られた』創元社、1997年。
 - ・鳥塚義和『一五年戦争教材発掘あれこれ』日本書籍、1999年。
 - ・同「民衆の戦争責任を問う・一五年戦争」(安井俊夫編『子どもとつくる近現代史第一集』日本書籍、1998年)。
 - ・同「赤紙一枚で戦場へ―民衆の戦争責任を問う」(『房総史学』No.40、2000年)。

<資料・赤紙・略>

□リレー書評③／石井建夫『石井建夫著作集 はてなの社会科―再び“希望と生气”を語る社会科を』国土社、2011

子どもの視点から授業をつくった石井実践

関根千春(鎌ヶ谷支部)

本書は、石井建夫さんが自らの中学校、大学教員として行ってきた実践やその実践を通して構築してきた社会教育・歴史教育論などをまとめたものです。いくつかの実践などは、直接、歴教協の全国大会や千葉県歴史教育研究集会などでうかがったものがあり、なつかしく当時を思い出しました。単なる実践集ではなく、授業づくりの視点や教材研究の方法、子ども論など、さまざまな視点からの言及があり、多くの社会科教師、特に若い先生方にぜひ手にとってもらいたい1冊だと思いました。

以下、本書を通して石井さんの実践や考えにふれ、私自身が感じたことを述べたいと思います。感じたことを羅列することになることをお許しください。

石井さんは、中学校の教員希望でしたが、初任から9年間小学校の教員を経験しました。念願の中学校へ移動した後も、「荒れた」中学生を前に授業以外での生徒指導に多くの時間を費やしました。しかし、石井さんはその「荒れ」の問題に教科指導、社会科教育を通して立ち向かいました。非行を初めとする中学生たちの「荒れ」に対する指導は、中学校の教員ならほとんどの人が経験しています。そのなかで、問題行動への対処の忙しさに追われ、授業がおろそかになってしまった経験もあるはずですが、石井さんの学校教育の中心が授業であること、教科指導を通して生徒たちが抱えている問題をとらえるという視点は、改めて私たちがしっかり確認しなければならないことだと思います。そして、教科指導の中でも社会科教育こそが、その視点をストレートに打ち出せるということを社会科を担当する教師は自覚すべきだと本書を読んで強く思いました。

また、石井さんは、思春期を迎えた中学生という特性に、常に注目し、社会科の授業づくりに取り組んできました。発達段階をふまえた教材選びや授業方法など学ぶ点が多々あります。学びの主体である子どもへの視点を常に大切にしてきた石井さんの実践から私は多くのことを学びました。そのような石井さんですが、初任のころは自分が教えたいことを中心に教材研究をし、子どもの視点が無かったことを自ら分析しています。常に実践を振り返り、より良いものを求め続ける自らも学びの主体である教師であったからこそ到達した視点だと思います。そのような姿勢も私たち教師は忘れてはいけないと思います。

さらに、石井さんは子どもたちの視点に立ち、子どもたちの疑問や問いかけから授業づくりを進めるのですが、教師の指導性についても重要視しています。教師と子どもたちが存在して両者の共同作業で授業は成立すると思うのですが、そこには歴然と立場の違いがあり、それぞれの立場での役割を果たすことがとても重要なことだと思いました。それぞれの役割を十分に果たすために教材選びが重要で、その教材によって教師は子どもたちに仕掛けることができると述べられています。

私が、本書を読む中で改めて石井さんから学んだことは、中学生たちが抱えている非行などの社会問題を歴史の中に位置づけて考えていることでした。「自分こわし」など思春期特有の発達課

題に加え、さまざまな社会的事象の影響が子どもたちの問題につながっていることは多くの人が指摘しています。その社会的事象は歴史の一場面であるがゆえに、歴史教育の中で中学生たちにアプローチし、彼ら自らに考えさせていく、そこから社会科教育の使命やロマンを石井さんは感じていたように思います。

石井さんが教科指導を重要視し、授業づくりに取り組んできたことは、中学校の現場を離れて住民運動に携わる中でも模擬授業という方法で運動を牽引していったことにつながったと思います。社会科の教師であるという使命感が石井さんを動かしていたのかもしれませんが。

本書には、本当にさまざまな実践(授業実践に限らず)が掲載されています。たくさんのエッセンスがあり、一度読んだだけでは消化しきれないと思います。私たちが学べる、考えることがたくさんあり、授業実践を始めさまざまな活動にヒントや方向性を示してくれると思います。私も、自らの実践を振り返りながらより良い実践を積み重ねるために、今後繰り返し読み返したいと思います。

□リレー書評④

石井実践を改めて読んで石井さんを悼む

三橋広夫(千葉支部)

石井さんが送ってくれた『はてなの社会科』の最後に「いまだに医学の風が吹かない世界に入りましたが、考える脳だけは残った。家族と「チーム石井」で次世代までこの苦しみを残さない「実践」を行うつもりです」という一文がある。ここに石井さんのすべてがあるような気がしてならない。

中学校社会科、あるいは歴史教育について真剣に考え、実践していた石井さんの姿はいまでも目に浮かぶ。私などはその足下にも及ばない。中学校歴史学習のカリキュラムづくりを呼びかけ、一つひとつ丁寧に実践し、提起した。そのなかに「対馬から見た秀吉の朝鮮侵略」がある。私の拙い実践を取り上げ、国家という図式にとらわれず「沙也可を通して国家を越える連帯という視点」によって新たな学習が展開でき、「沙也可たちの行動をどう考えるか」など論争的な学習が可能となるが、「沙也可が英雄的になるという問題」がある、と看破している。

その「降倭将沙也可を通して学ぶ秀吉の朝鮮侵略」(『歴史地理教育』1999年7月号)に石井さんが指摘したような弱点があったことを反省し、自分なりに工夫して実践の方向を変え、後に韓国の中学生とも授業をすることができた。

沙也可の授業の弱点に、石井さんの批判がなければおそらく気がつかなかっただろう。その意味でも石井さんはなかまでもあり、またよき先輩でもあったことを改めて思う。

同時に、石井さんの授業にも課題がある。対馬にこだわることには異議はないが、「3世紀頃の日本」「蒙古襲来」「倭寇」「秀吉の朝鮮侵略」「朝鮮通信使」「日清・日露戦争」だけでよいのだろうか。この枠組みに「幕末の対馬」を入れ、日朝の交流から「日本の戈」へと舵をきったことを考えさせ、さらに「植民地支配」の過程で対馬から多くの人々が朝鮮に渡っていったこともとらえさせたい。そして、今はどうなのか。多くの韓国人が観光で訪れる。韓国語を学ぶ人も多く、ハングルが至るところで見られる。しかし、人々はその現象をどう思っているのだろうか。

また、「対馬から見た秀吉の朝鮮侵略」でも「対馬」とひとくくりになっているが、支配者である宗氏と対馬の民衆ではとらえ方が違うだろうし、侵略戦争に狩り出された民衆からすると宗氏の考えや行動はどう見えるのかなどの視点が子どもたちから発せられる授業はどうしたらできるのか、考えたい。そうしてこそ対馬から歴史を考える、ということに近づけよう。

こんなことも石井さんと論じてみたかった。きっと違った視点で三橋の授業にはここに陥穽がある、と言ってくれたに違いない。

メールで千葉県歴教協会報「なかま」を配信しています。ご希望の方は下記までお名前とその旨をお知らせください。
chibarekkyo@csc.jp
また、職場や地域のことなどもぜひご投稿ください。(M)